

若者世代のジェンダーとセクシュアリティに 関する日瑞比較

訓 覇 法 子
石 倉 康 次

1. 比較調査の背景・目的・研究方法

性意識や性行動に関する調査によって呈示されるのが、往々にして支配的な男性とその男性に従う受動的な女性というステレオタイプのジェンダー図であった。しかしながら、現代の女性は忍従と拒否という保身的な戦略とともに、男性支配を打破すべく積極的な戦略を実践し始めている¹。スウェーデンの男女平等政策、日本の男女共同参画社会形成政策の展開などにも見られるように、ジェンダー視点は近年重要な政策課題として位置付けられてきた。現代核家族における男女間の伝統的な性別役割分担は、徐々にではあるが従来とは異なる方向に変化しつつある。新たなジェンダー・アイデンティティの模索が促されてきた要因としては、晩婚化、非婚化、離婚、少子化や子どもを生まない夫婦、単身世帯、同性愛者世帯や再構成家族などの増加による家族構造の変化と家族形態の多様化、ライフスタイルの個別化、それらに伴う家族規範の変化などに加えて性産業の拡大化・多様化などが指摘される。このような、社会の基礎集団を中心とする社会的構造の変化の下で、人びとの性意識と性行動はどのような方向に向かって変化しつつあるのか？性意識と性行動はジェンダーと密接に関連するが、日常生活において従来の因襲的パターンを打破しようとするジェンダー戦略がどこまで浸透しつつあるのか？ジェンダー・アイデンティティの変化は、性意識と性行動にどのように影響を与えているのだろうか？現代の若者たちは、どのような性体験を持ち、どのような性意識を形成しつつあるのか、それらを現代社会構造の変化においてどう理解すればよいのか？

これらを調査目的として「若者・ジェンダー・セクシュアリティ」プロジェクト・チームが、2000 年秋と 2001 年春、スウェーデンのイェーテボリイ (Göteborg) 市とカルマル (Kalmar) 市で、基礎学校 9 年生 (15 歳) と高等学校 3 年生 (18 歳) を対象にアンケート調査を実施した²。

回答者は合計 1331 人、639 人 (48%) が男子生徒であり、680 人 (52%) が女子生徒であった³。基礎学校 9 年生は全体の 51%、高等学校 3 年生は全体の 49%を占める。アンケート調査と平行して、集団・個人インタビューも実施された。

2003 年秋、上記と同じ調査項目によるアンケート調査 (パイロット調査) が、著者を含む上記のプロジェクト・チームによって、広島大学 1 年生を対象に 2 つの異なる社会学講義時間を利用して実施された⁴。スウェーデン調査と同様、男女別のグループインタビューもアンケート調査後実施された。

日瑞比較調査の目的は、福祉国家レジーム類型や社会保険制度国際類型⁵においてスウェーデンとは著しく異なる家族政策や男女平等政策がとられてきた日本の若者の性行動および性意識をスウェーデン調査の結果と比較することによって、スウェーデンの若者のセクシュアリティの特徴を国際的視点からより明確にするとともに、グローバリゼーションの進行する現在、日瑞両国における類似性と差異を発見することであった。

この小論文の分析に使用した日本のデータは、先に述べた調査の回答者 18~20 歳の年齢グループ 178 人 (男子学生 70 人、女子学生 108 人)⁶ である。アイデンティティとジェンダー認識に分析の焦点をおき、愛とセックス、ベッドにおける平等、ポルノに対する見方、同性愛、身体・自画像・恥などのテーマ別に日瑞比較を行う。最後に、日瑞両国の若者のジェンダー認識と性意識・性行動の変化に関する類似性と差異を論じる。

日本の調査はパイロット調査であり、しかも、脱青年期の前半の若者世代であるが、日本の回答者の一部の年齢がスウェーデンの回答者より相対的に高いことと女子回答者数が多いため、結果はあくまでも仮説的なものであり、類似性と差異の記述に留まる。日本の調査データの信憑性と調査結果の妥当性を吟味するために、1999 年に実施された NHK 調査⁷の中から年齢グループ 16~19 歳 (n=98) に関する調査結果と、2001 年に実施された 15~18 歳の「高知県の高校生の『性』意識アンケート」調査⁸ (n=599) の一部分を参考とした。

2. 愛とセックス

現代社会における性道徳あるいは性規範は以前よりも自由になり、セックスの前提として愛の存在を当然だと考えなくなってきている。しかし、依然として愛とセクシュアリティの関係は複雑である。家族形成あるいは「再生産」の観点から、ロマンチックな愛を前提としたセックスは当然の行為として正当化されるが、性の欲望、充足感、快楽を求めるセクシュアリティは未だにタブー視されがちである。セックスにおける「愛への義務付け」(ロマンチック・ラブ願望) は特に若い女性のセクシュアリティに支配的であり、女性は自分の欲望を情緒化し、男性は性感化するといえよう⁹。

「愛の義務付け」は女性の方に強いというものの、規範に従うことから自分の欲望を満足させるための若者の性的実験志向が高まってきていることや、性規範における男女間の距離が狭まっ

表1：「女子が愛なしにセックスすることは間違いである」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	14.2	30.0	21.4	24.4	10.0
瑞国 (n=629)	12.4	11.6	17.2	12.9	45.9
女子					
日本 (n=108)	30.6	34.3	13.9	15.7	5.6
瑞国 (n=674)	20.8	8.8	19.9	11.3	39.3

てきていることも指摘される¹⁰。

セックスをロマンチック・ラブ願望から捉える傾向は両国ともに女子に根強く、両国を比較するとスウェーデンの若者より日本の若者に支配的である。

日本の若者の過半数が、女子の愛なきセックスは間違いであると答えている（表1）。ただし、セックスの前提として「愛への義務付け」に左右される男子は女子に比べると少ない。日瑞両国の男子を比較すると、女子が愛なしに性交することは間違いではないと答える日本の男子は3割強に過ぎないが、スウェーデンの男子はその倍の6割に達する。女子間でも、日瑞両国の差が見られ、6割以上の日本女子は愛をセックスの前提として重視するが、スウェーデンの女子のその割合は3割以下である。しかし、日本の若い女性の愛の義務付けがもはや結婚に直結したものであることは、グループインタビューから明らかである。

「愛がないセックスは可能だと思うけれど、愛があればそれに越したことはない。／...／愛情関係があればいいのであって、結婚している必要はない」

表2に見られるように、男性のセックスに対しても「愛への義務付け」を求める割合は、男女ともにスウェーデンの若者（男子23%、女子31%）よりも、日本の若者に高い（男子42%、女子65%）。しかし、愛なきセックスが間違いでないと答える割合は男子の方が高い。両国ともに、

表2：「男子が愛なしにセックスすることは間違いである」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	12.9	28.6	22.9	25.7	10.0
瑞国 (n=629)	11.1	11.7	16.2	12.9	48.1
女子					
日本 (n=108)	28.7	36.1	15.7	14.8	4.6
瑞国 (n=674)	20.5	10.5	19.2	11.0	38.8

セックスに「愛の義務付け」を求める傾向は女子の方に著しい。

NHK 調査においても、79%の男子および73%の女子がセックスは「愛情表現」として答えている。セックスが「快楽」として答える割合は、女子よりも男子に高い(27%対40%)。高知調査では、女性にとっての性行為(セックス)に関しては女子の77%が、男性の性行為に関しては男子の51%が、性行為は「愛情を確かめるもの」と回答している。それぞれの性行為が「快楽をえるためである」と答える割合はNHK調査と同様、女子より男子の方が高い(12%対37%)。

では、若者世代は一夜(その場)限りのセックスをどう見ているのであろうか?

スウェーデンでは18歳の若者の半数以上が一夜限りのセックスを体験しているが、日本の若者では体験者の割合は10パーセントにも満たない(表3)。2~3割の日本の若者はセックスの前提としての「愛」は必要ではないと答えているにもかかわらず、実際の性行動においては依然として規範的であり、保守的であることが明らかである。

日本の若者の理想像と実際の行動のギャップがどのくらいであるのかはこの調査からは判りえないが、NHK調査によれば自分の恋人以外の人とセックスを持つことへの若者世代の許容意識は高くなってきている(35%男子、43%女子)にもかかわらず、実際に恋人以外の人とセックスを経験した割合は極めて低い(9%男子、4%女子)。また、セックスの動機として「性的な快楽」を選択する人々の間では、男女有意差は見られなく、若者世代の女性の性意識・性行動の男性化あるいは両性間の接近が指摘される¹¹。

表3：一夜限りのセックスを経験した割合

	一夜(その場)限りの性交経験有り	一夜(その場)限りの性交経験なし
男子		
日本(n=70)	8.6	91.4
瑞国 18歳	59.0	41.0
女子		
日本(n=108)	6.5	93.5
瑞国 18歳	43.0	57.0

3. ベッドにおける平等

現代の若者世代の平等に関する認識の高揚や性意識の均等化が予測されるにもかかわらず、スウェーデンにおいても伝統的な性別役割分担や性意識・性行動の存続が指摘されてきた¹²。

スウェーデンの若者たちの7割以上が、女子も男子と同じようにセックスのイニシアチブを取るべきだと回答しており、女子より男子の方が幾分女子のイニシアチブを歓迎する傾向がある(表4)。男子がセックスのリード者という伝統的な役割を捨てたいという意識の表れとして解釈

することもできる。日本の若者で対等なイニシアチブを当然であるとみなす割合は明らかに低く、男女間の差が大きい（男子 42%，女子 28%）。また、男女ともにおよそ半数が「幾分一致する」と答えるように、伝統的な性別役割分担から対等な役割分担への移行に慎重的な態度が見られる¹³。

表 4：「女子も男子と同じようにセックスのイニシアチブを取るべきだ」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=68)	17.6	23.5	45.6	11.8	1.5
瑞国 (n=629)	59.6	18.7	16.6	2.6	2.6
女子					
日本 (n=103)	10.1	17.5	56.3	14.6	1.0
瑞国 (n=661)	49.3	21.6	20.3	3.8	5.0

NHK 調査では、男女ともに約 4 割が「男性はセックスでは女性をリードすべきである」と答えており、「女性は男性のリードにしたがうべきである」と答えた割合は男子 17%，女子 27%であった。また、男女共に 3 割以上が夫には妻にセックスを求める権利があると答えている。さらに、15%の男子が「いやがる相手にセックスを強要してみたい」という願望を持っている。特に男子の性の平等に対する認識度は低く、保守的かつ攻撃的マッチョ傾向が指摘される。

高知調査でも、12%の女子が性交時に男子にコンドームを使用してほしいといえないと答えている。日本の若者世代において、性の役割分担に関する伝統的な見方はいまだに支配的であるといえる。

売・買春に関して、両国の若者世代はどう考えているのであろうか。スウェーデンでは、1998 年買春禁止法が制定され、買春行為は刑法によって罰せられることになった¹⁴。

「多くの男子と寝た女子は売春婦だ」と思わない若者は、スウェーデン・日本男女ともに約 6 割に達する（表 5）。そう思うと答える割合は両国ともに約 2 割である。

表 5：「多くの男子と寝た女子は売春婦だ」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	1.4	18.6	24.3	34.3	21.4
瑞国 (n=628)	12.1	9.1	20.4	18.9	39.5
女子					
日本 (n=108)	8.3	8.3	30.6	33.3	19.4
瑞国 (n=667)	10.8	11.2	21.9	17.1	39.0

「多くの女子と寝た男子はみだらな男だ」と思わない男子は、両国ともに約 5 割、女子は 3 割から 3 割半である (表 6)。そうは思わない割合は、両国の男子に比べて女子の方が高い。日本の女子の回答には「幾分一致する」という答えが相対的に高いように、伝統的な考え方からより自由な考え方に対して慎重であり、ひとつの過渡期にあることが想像される。スウェーデンの男子は男女に対して対等な見方をしているが、女子は多くの女子と寝た男子の方に批判的である。日本の若者は、男女ともに男子に対して批判的である。両国の男子の半数が多くのパートナーを持つ男子に批判的である。普通、男子が多くのパートナーを持つ女子を批判するのが普通である事から考えると、この結果は興味深い。性規範の焦点が、性別ではなく、パートナー数の適切さに移行してきており、男女間の距離が次第に歩み寄ってきていることが想定される。ただ、ひとつ留意されなければならないことは、“hora” (英語 whora) を売春婦と訳したことで、「みだらな男」より意味合いが強くなったことである。ただし、売春婦に相当する男性側の適切な概念は必ずしも明確ではあるとは言えない。

表 6: 「多くの女子と寝た男子はみだらな男だ」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	11.4	20.0	20.0	32.9	15.7
瑞国 (n=624)	10.9	10.9	26.8	15.9	35.6
女子					
日本 (n=108)	13.0	24.1	30.6	23.1	9.3
瑞国 (n=669)	19.6	17.0	27.8	17.8	17.8

買・売春に対する日本の若者の許容度は著しく高い (表 7, 8)。買春は禁止すべきだという日本の男子は 20 パーセントであるが、スウェーデン男子のその割合は倍以上の 50 パーセントに達する。逆に、日本男子の半数以上が買春を禁止する必要はないと答えている。女子においてもほぼ同様な回答パターンが見られ、日本女子の半数近くが禁止すべきだと答えているのに対して、禁止すべきだというスウェーデン女子は 70 パーセント以上に達する。

売春の禁止に関してもほぼ同様な回答が見られるが、日本男子のみが買春よりも売春の禁止により厳しい態度を見せている。男性中心の性秩序・性規範が支配的であることがうかがえる。

日本のグループインタビューでは、男女ともに生活手段としての売春と性的欲望など満たすためのそれとを区別して考えていることが明らかである。

「売春は生きていくために必要なら、仕方がない。しかし、セックスの欲望を満たすためや、高い洋服などの購入などの他の欲望を満たすためならいいとは思わない」

表7:「買春は禁止すべきである」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	5.7	14.3	24.3	35.7	20.0
瑞国 (n=290)*	36.6	13.8	17.2	14.8	17.7
女子					
日本 (n=108)	22.2	26.9	16.7	27.8	6.5
瑞国 (n=351)*	62.4	14.8	12.3	5.1	5.4

* 19歳の回答者のみに限定.

NHK調査では、買・売春に関しては男子(16歳~20代)の経験者(3割強)の方が未経験者(約2割)より許容的(かまわない・どちらかといえばかまわない)である。女子には経験者・未経験者間の差は見られない。

表8:「売春は禁止すべきである」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	20.0	18.6	27.1	24.3	10.0
瑞国 (n=288)*	33.4	15.6	21.9	12.8	16.3
女子					
日本 (n=108)	30.6	25.9	23.1	16.7	3.7
瑞国 (n=353)*	50.7	21.8	18.7	4.8	4.0

* 19歳の回答者のみに限定.

女子の性欲に関しては、日本の若者の回答分布図はスウェーデンの若者ほど両極的でないにしろ、相対的に類似する(表9)。スウェーデンの方が1~2割高いものの、両国の若者の過半数以上が男女ともに、「女子にも男子と同じくらい性欲がある」と答えている。そう答える女子の割合は両国ともに男子より幾分高い(日本69.3%対63%、スウェーデン84.7%対73%)が、男女の見方の接近が明らかである。

日本のグループインタビューでは、1人の女子学生は「生物学的に男と女は違う。男性の性欲の方が強いと思う」と、答えている。ただし、「体位などのセックスの話は女性同士ではしても、男性のセックスについてはそれほど情報が得られないから、男性のセックスについてはほとんど知らない」とも、答えている¹⁵。

表 9: 「女子にも男子と同じくらい性欲がある」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	32.9	30.6	27.1	8.6	1.4
瑞国 (n=623)	55.7	17.3	16.5	4.0	6.4
女子					
日本 (n=108)	34.2	35.1	21.3	7.4	1.9
瑞国 (n=673)	69.5	15.2	8.6	2.5	4.2

女性の自慰に関しても、男女間の接近傾向が指摘される (表 10)。両国の若者の過半数が男女ともに、女性の自慰行為が嫌悪的なものとは思わなくなっている。今日自慰は、女性に対する性規範が相対的に強かった日本においてでさえも、自然な行為として容認されているといえよう。ただし、スウェーデンの若者の回答パターンと比較すると、日本の若者のそれには慎重さが見られる。嫌らしいと思うと答えた日本の女子割合は、スウェーデンの女子より低いが (1.0% 対 8.4%)、中間的回答にあたる「幾分一致する」と答えた割合は圧倒的に高い (27.4% 対 9.9%)。

表 10: 「自慰をする女子は嫌らしい」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	1.4	7.1	18.6	34.3	38.6
瑞国 (n=623)	4.3	2.9	7.4	10.1	75.3
女子					
日本 (n=106)	1.0	6.6	27.4	46.2	18.4
瑞国 (n=673)	8.4	4.5	9.9	7.2	70.1

4. ポルノと性意識

ポルノに対する見方は多様である。ポルノの定義ひとつを取り上げても、何をもってポルノと定義するのは容易ではない。何を根拠に素晴らしいエロチシズム、あるいはソフト・ポルノとみるのか、侮辱的で抑圧的なハード・ポルノと見るのかという問題がポルノ議論において取り上げられる必要があるだろう。ポルノがソフト化した今日、若者世代が、ポルノ映画、アダルト・ビデオ、アダルト・グラフィア誌、成人漫画などの多様なポルノ商品に接触することはいって容易である。ポルノはまた、広告、音楽産業、モード業界にも著しいインスピレーションを与えている。ポルノ市場の拡大によって、消費の形態が多様化し、消費対象者が普遍化したことも指摘される。このような変化は、人々の性意識や性行動に対してどのような影響を与えたのだろうか。

性の平等を平等政策の一環として重視するスウェーデンに比べると、日本のポルノ市場は市民の日常生活に深く浸透してきている。ポルノ漫画は、一般の書籍店、駅のキオスク、コンビニエンス・ストアなどで他の商品と同様に自由に購入でき、貸しビデオ店でアダルト・ビデオを借りることは容易である。今日の日本の若者は、ソフト・ポルノ商品の日常的消費者であるといつてよい。広島大におけるグループインタビューでも、ほとんどの男子学生が何らかのポルノ商品、とりわけポルノ漫画を日常的に消費していることが明らかである。ポルノ漫画には強姦あるいは強姦に近い暴力的な性シーンが氾濫するが、インタビューに参加した男子学生はそれが特に「問題」であるとは思わないと答えている（後述参照）。

ポルノに対する考え方は、男女間の格差が比較的大きい分野であるが、一方男女間の接近も指摘される。

男女ともに、日本の若者の方が答え方は慎重であるが、ポルノに対して全体的に許容的であることが明らかである（表 11）。「非常に良くない」と答えた日本の男子は皆無である。また、「まあまあ良い」と答えた日本の女子はスウェーデンの女子の 2 倍である。「非常に良くない」と思う日本の女子は、スウェーデンの女子の 5 分の 1 以下である（6.5%対 34.5%）。

表 11：「あなたはポルノをどう思いますか？」

	非常に良い	良い	まあまあ良い	あまり良くない	非常に良くない
男子					
日本 (n=69)	8.7	30.0	43.5	18.8	0.0
瑞国 (n=623)	19.0	21.7	36.7	16.2	6.4
女子					
日本 (n=107)	1.0	2.8	34.6	55.1	6.5
瑞国 (n=673)	2.7	7.6	18.1	37.0	34.5

表 12：「ポルノは刺激的である」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	20.0	38.6	22.9	15.7	2.9
瑞国 (n=623)	27.4	23.7	25.8	9.6	13.5
女子					
日本 (n=106)	13.2	36.8	35.8	10.4	3.8
瑞国 (n=673)	6.3	7.8	19.0	17.5	49.3

ポルノは刺激的であると思う男子の回答パターンに両国間に類似性がみられる（表 12）。しかし、女子に関しては両国間での差異が大きい。ほぼ半数のスウェーデンの女子がポルノは刺激的

であるとは思わないのに対して、過半数の日本の女子は刺激的であると答えており、男子の回答率とそれほど変わらない。許容性が高いのは、日本社会におけるポルノ商品の日常的浸透による影響と同時に、ポルノに表現されている男性支配的なジェンダー秩序への認識が低いのか、もしくは欠如することが考えられる。

表 13 が示すように、半数近くの日本の女子がポルノは屈辱的であると思わないと答えている。刺激的であれば、屈辱的だと思わない構図が指摘される。それに対して、過半数がポルノを刺激的だと思わないスウェーデンの女子の 9 割近くがポルノは屈辱的であると答えている。女性がポルノに対して否定的な理由は、第一にポルノは男性によって男性のために作られたものであり、裸の女性が被写体にされることによる。1980 年代のアンチ・ポルノ・フェミニズムは、すべての男性が潜在的強姦者であるという見地に立ち、ポルノを女性に対する攻撃だとみなした¹⁶。第二に、ポルノはロマンチックなセックスの理想像を破壊する¹⁷。しかし、若い女性異性愛者の間で、刺激と嫌悪感という相矛盾したポルノ観が存在することも指摘される。日本の女子の肯定的なポルノ観が何によるのかを明らかにするには、さらに詳細な調査が必要とされるが、日本社会におけるフェミニズムの希薄さが背景として考えられる。

表 13：「ポルノは屈辱的である」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	2.3	4.3	22.9	44.3	25.7
瑞国 (n=623)	18.9	18.0	28.0	14.6	20.4
女子					
日本 (n=107)	9.3	10.3	37.3	35.5	7.5
瑞国 (n=673)	48.0	20.6	20.3	5.1	6.0

グループインタビューでは、日本男子は、たとえば、多様なセックス場面において女子がどのように感じるのかなどの、疑似体験を可能にしてくれると答えている。ポルノ漫画などに登場する虐待的あるいは暴力的なセックスを問題視しないのは、彼らは「それはフィクションであって現実ではない」からだと答えている。多くの若い男性にとって、ポルノは禁じられた性欲のファンタジーを満たすことのできる世界であるといえる。

NHK 調査を見ても、アダルト・ビデオは過半数の若い男子 (72%) にとって重要なセックスの情報源であることが明らかである。その他の情報源としては、アダルト・グラビア誌 (68%)、深夜のバラエティー番組 (55%)、ポルノ漫画 (53%) が挙げられている。女子にとってもポルノはセックスの重要な情報源であることに変わりなく、深夜のバラエティー番組 (56%)、女性誌 (51%)、ドラマ (44%)、少女漫画 (33%) などが挙げられている。

高知調査では、過半数 (男子 78%、女子 75%) の高校生の主要なセックスの情報源は友達で

ある。ただし、男子の55%がアダルト・ビデオを次の情報源として挙げている。1992年の日本性教育協会の調査結果によれば、アダルト・ビデオを観ているグループは観ていないグループに比べ、性の役割分担に保守的であり、性の商品化に対して肯定的である傾向が高いことが指摘されている¹⁸。

スウェーデンにおいても、ポルノが男性をしてアナル・セックスあるいはオーラル・セックスを女性に強要する傾向を生み出すのではないかと危惧されてきた。実際、ポルノ鑑賞者の方が鑑賞者でない者よりも、アナルおよびオーラル・セックスの体験率が高いことを示す調査もある¹⁹。日本のデータでは相関性が欠如するが、スウェーデンのデータはポルノ鑑賞者の方がアナルおよびオーラル・セックスの体験率が高いことを示している。他にも、自分の体に対する満足度が高い、自分がセクシーであると思う、自慰をそれほど恥ずかしいと思わない、愛なしのセックスや売春への許容度が高いなど、ポルノ鑑賞の影響がいくつか指摘される²⁰。

5. 同性愛

「家族形成」や「再生産」議論において、「同性愛」は「異性愛」を基盤とする正統なセクシュアリティを脅かす存在として捉えられてきた。

過去の調査によれば、スウェーデンでは、約4分の1が同性愛者に対して非許容的な見方をしており、その割合は相対的に地方都市、男性、低学歴者、高齢者グループに高い²¹。

同性愛者のパートナーシップ、養子縁組、レスビアン・カップルの生殖補助出産などが法的に認められる今日、社会全体の同性愛観の変化が若者たちの性意識・性行動にも影響を与えてきたことが予測される。ただ、同性愛者としてのデビューは年齢的に10代の終わりから成年の初めにかけてであることから、自分の直接的問題としては向き合う10代の若者は少ない。若者の同性愛観は往々にして矛盾に満ちており、「ホモ・フォビア」(同性愛恐怖症)が見られる反面、10年前と比べると音楽や映画文化、メディアの影響を受けて確実に許容的になってきている。同性愛に対する非許容性は普通、女子よりも男子に著しい。

スウェーデン男子の約半数が「同性愛は一種の精神病である」と答えているのに対して、同意する女子は約20パーセントである(表14)。男子の回答パターンは、完全に距離をおくグループと、そうでないグループに二極化している。「ホモ・フォビア」は、自分の性アイデンティティ形成のプロセスを容易にし、自分が「正常」であることを定義するために用いられる戦略であることが多い²²。

しかし、男子より女子の同性愛の許容度が高いのは何故であろうか？まず、考えられることは、フェミニズムの観点から見れば、女性の性が伝統的なジェンダー秩序によって権力構造の底辺に抑圧されてきたために、疎外されたグループに共感を抱きやすいことである。「ホモ・フォビア」は、従って伝統的な性の役割分担に大きく依拠するものだといえる。

男子、女子ともに日本の若者の許容度が高い最大の理由は、日本の調査グループに「ホモ・フォ

ピア」に陥りやすい 15 歳グループは存在せず、スウェーデン調査グループ（15 歳ならびに 18 歳）よりも数歳高い年齢グループ（19, 20 歳）が混じっており、平均年齢が高いことに依存すると思われる。「ホモ・フォビア」という用語は、もともと男性異性愛者から排除され、抑圧されてきた同性愛者の体験的心情を表現するものとして、1970 年代初めに登場してきた。同性愛者の権利を要求するゲイ運動は、社会全体に浸透した「ホモ・フォビア」がいかに支配的な男性観と密接に結びつくかという認識に原点を持つ²³。同性愛者にいわせれば、男性異性愛者は同性愛の潜在的願望者であり、「ホモ・フォビア」は同性愛者に対する「憎しみ」に転換させられた無意識的な願望の表現としても使用されてきた。ただし、「ホモ・フォビア」は単なる見方や態度にとどまらず、男性異性愛者の男性同性愛者への敵対心として、労働生活における差別など一連の社会的抑圧行為として実践されてきた²⁴。

同性愛者への社会的容認度が低く、したがって同性愛者の権利運動も相対的に弱く、異性愛を家族形成の基本的価値観にすえてきた日本の男性支配社会においては、若い男性の自由な性アイデンティティの形成は規範的に制限されてきた。そのことは反面、日本の若い男性が「ホモ・フォビア」に直面させられずにすんできたといえるのではないか。

表 14：「同性愛は一種の精神病である」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=70)	8.6	15.7	17.1	24.3	34.3
瑞国 (n=636)	26.1	9.7	13.8	13.1	37.3
女子					
日本 (n=108)	1.9	5.6	11.1	25.9	55.6
瑞国 (n=665)	9.9	4.3	8.3	9.9	67.6

表 15：「同性愛者の養子縁組を当然だ・可能にすべきだ」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=69)	18.8	29.0	24.6	17.4	10.1
瑞国 (n=632)	14.9	9.7	12.5	9.2	53.8
女子					
日本 (n=108)	25.9	26.9	33.3	12.0	1.9
瑞国 (n=672)	28.4	15.8	18.2	11.0	26.6

スウェーデンで、同性愛者の養子縁組の可能性が深刻な社会議論となったのは 1995 年頃からであった。今日養子縁組は法的に可能であるが、過去のデータがないために若者世代の同性愛意

識の時間的変化を見ることは不可能である。しかし、同性愛の養子縁組に関しても両国ともに女子の方が許容的であることが明らかである（表 15）。

男子について言えば、日本の男子の方がホモ・フォビア傾向の強いスウェーデンの男子よりも許容的である。同性愛者の養子縁組に完全に距離をおく割合は、スウェーデンの男子では半数以上を占めるが、日本の男子では 10 パーセントに過ぎない。ただし、日本男子の回答はスウェーデンの男子のように両極化せず平均的に分散する。スウェーデンの女子の回答も男子ほどではないにしろ両極化傾向が見られるのに対して、日本の女子は「幾分一致する」を入れると 80 パーセント以上が養子縁組を支持している。

同性愛者の親をどう思うかという質問に対しては、両国ともに男子の意識は一定の方向に固まらず、平均的に分散する。同性愛者の養子縁組に対するよりも肯定的であるが、4 割近くのスウェーデンの男子が同性愛者の親は良いとは思わないと答えている（表 16）。女子は、両国とも過半数が肯定的である。

表 16：「同性愛者も異性愛者と同じように良い親である」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=69)	29.0	24.6	24.6	14.5	7.2
瑞国 (n=626)	20.8	11.3	19.5	10.9	37.5
女子					
日本 (n=108)	49.1	24.1	21.3	4.6	0.9
瑞国 (n=665)	43.6	13.8	20.3	9.3	12.6

スウェーデンの男子の 7%、女子の 10% が同性の相手とセックス体験があると述べている。年齢格差は見られない。日本では男子の 4%、女子の 1% が体験者であり、年齢が高いわりには女子の同性愛経験が極めて低い。フェミニズム運動の希薄性によるものか？ また、スウェーデンの若者では、同性とのセックス未経験者の 15 パーセントが同性愛者とのセックス願望を表示している。願望を表示する日本の若者は 4 パーセントとこれまた低い。日本の若者においては、許容度が高くても実際の性行動へは距離があるようである。

6. 体, 自画像, 恥

スウェーデン調査によれば、多くの若者にとって他の人の最初の出会いで重要なのが「外見・容姿」である²⁵。半面、若者は「パーソナリティ」と「内面的」な質が人を評価するための重要な側面だとも考えている。「パーソナリティ」は現実のパートナー選びとはかけ離れた理想として位置付けられているのであろうか。

「人」としてよりもむしろひとつの「物」として扱われるようになった体は、造り変えることが可能であり、社会的地位と性的魅力を表現するための道具として、周りから自分がどのように見られたいかという願望を表現してくれる。今や、体重や容貌は個人の選択によって決定され、人々は願望を満たすための手段としてダイエットや美容整形を商品として購入する。個人のアイデンティティ、ライフスタイル、サブ・カルチャーの形成において中心的な役割を担うのが体の整形や装飾であり、ゆえに若者が、体形、スタイル、洋服にこだわることはそれほど不思議なことではない²⁶。その基準となるのが、メディア産業が創出するコスメティックな美と性的魅力である。自分の現実の体と社会が生み出す固定観念的な理想像とのギャップは、若者の肯定的な自画像を崩壊することになりかねない。整形と装飾による体の造り変えが個人の自由となった今日、失敗への責任も個人に背負わされる²⁷。その極端な例が拒食症である。社会の固定観念的な美の理想像が、自分の体に満足できない若い女性をダイエット行動に走らせ、ひいては拒食症へ発展させていくことは多くの調査によって明らかにされてきた²⁸。男性と比べて、女性の評価は往々にして外見によってなされるという社会的固定観念が、周りから容認されたいという願望を生み出し、体のコントロールを強制する。

このような背景から考えると、スウェーデンでは、男女ともに（男子の方がより肯定的であるが）過半数が肯定的な自画像を持っており、固定観念的な見方に距離を置いていることは意外である（表 17, 18）。

表 17: 「あなたは美しく・カッコイイと思いますか？」

	はい、非常に	かなり	それほどでもない	まったく思わない
男子				
日本 (n=70)	0.0	4.3	60.0	35.7
瑞国 (n=625)	21.9	49.8	26.1	2.2
女子				
日本 (n=108)	0.0	1.9	47.2	50.9
瑞国 (n=665)	10.1	48.0	36.7	5.3

表 18: 「あなたはセクシーだと思いますか？」

	はい、非常に	かなり	それほどでもない	まったく思わない
男子				
日本 (n=70)	0.0	1.4	44.3	54.3
瑞国 (n=625)	19.4	36.5	36.2	8.0
女子				
日本 (n=108)	0.0	0.9	29.6	69.4
瑞国 (n=663)	9.4	33.9	43.6	13.1

それに対して、日本の男女は極めて否定的な自画像を持っていることが明らかである。外見的な自画像で言えば、スウェーデンの2割強の男子、1割の女子が非常に美しい・カッコイイ、セクシーだと答えているのに対して、その割合は日本の男女ともに皆無である。逆に、日本の男女の100パーセント近くが、それほど・まったく美しいとは思わないと答えている。

今日、社会全体に及ぶものではないにしても、一部の若い世代における従来の「男らしさ」の多様化として、男性美の女性化（男性化粧品、美容整形、筋肉レスの男性美など）が指摘されるが、この調査でも日本男子は女子とほぼ同様の見方をしていることが明らかである。もっとも、日本と同様な形での男性美の女性化がそれほど進んでいないスウェーデンでも、男子の28パーセントがそれほど・まったく美しいとは思わないと答えている。ただ、自分を楽しい・社交的だと思うかという質問に対しても、両国では正反対の回答パターンが見られ、6割から7割の日本男女はそうは思わないという自己評価をしている（表19）。つまらないと思う割合は少ないが、それでもスウェーデンの若者と比較するとその割合は高い。スウェーデンの若者は、「外面」だけではなく「内面的」な質や性格についても肯定的な自画像を持っていることが明らかである。日本の若者において、内面的な自己評価の方が外面的なそれよりも高いということは、社会の固定観念的な美にいかにか影響を受けているかということが想像される。

自画像は、自分の体を恥ずかしいと思うことと大きく関連する。たとえば、自慰を恥ずかしいと思う割合は女子の方に高い。自分の性器をまったく、あるいはたまにしか恥ずかしいと思わない割合はスウェーデンでは過半数（男子80%、女子70%）に達するのに対して、日本では4分

表19：「あなたは楽しい・社交的／つまらない・非社交的だと思いますか？」

	はい、非常に	かなり	それほどでもない	まったく思わない
楽しい・社交的				
男子				
日本 (n=70)	11.4	22.9	47.1	18.6
瑞国 (n=625)	59.2	35.2	4.0	1.6
女子				
日本 (n=108)	5.6	34.2	50.9	9.3
瑞国 (n=663)	55.3	37.7	4.8	2.1
つまらない・非社交的				
男子				
日本 (n=70)	7.1	27.1	42.9	22.9
瑞国 (n=625)	5.8	10.8	41.4	42.0
女子				
日本 (n=108)	5.6	21.3	52.8	20.4
瑞国 (n=665)	4.7	11.3	48.3	35.7

の 1 以下（男子 24%，女子 23%）に止まっている。若者たちが性器の外見，大きさ，機能について悩みを持っていることは一般的な傾向であることが指摘されてきた²⁹。この調査では，自分の性器に満足している割合は，スウェーデンでは過半数（男子 73%，女子 63%）であるが，日本では，その割合は 1 割に満たない（男子 7%，女子 9%）。男子の方が体に対するコンプレックス・羞恥度は高い。また，自分の性器に非常に満足していると答えた日本の若者は男女ともに皆無であった。

相手に裸を見せるのは恥ずかしいと思う割合は，両国ともに女子の方に高いが，日本の若者は男女ともに半数以上が恥ずかしいと答えており，スウェーデンの若者たちの 4 倍に相当する（表 20）。

半数以上のスウェーデンの若者たちは恥ずかしいとは思わないと答えており，ここでも正反対の回答パターンが見られる。

表 20：「相手に裸を見せるのは恥ずかしいですか？」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=62)	24.2	30.6	21.0	21.0	3.2
瑞国 (n=503)	6.6	7.0	19.1	27.2	40.2
女子					
日本 (n=81)	50.6	19.8	13.6	13.6	2.5
瑞国 (n=528)	9.7	11.9	26.1	22.3	29.9

一般的に自分の体を恥ずかしいと思う割合はさすがに，自分のパートナーに対するより低いが，「幾分」という答も包括すると，日本の男子の 5 割（スウェーデン男子約 4 分の 1 弱），女子の 8 割（スウェーデン女子 5 割弱）が自分の身体を恥ずかしく思っている（表 21）。

表 21：「自分の体を一般的に恥ずかしいと思いますか？」

	完全に一致する	大体一致する	幾分一致する	あまり一致しない	全く一致しない
男子					
日本 (n=69)	4.3	21.7	27.5	21.7	24.6
瑞国 (n=613)	2.1	5.7	15.3	28.9	48.0
女子					
日本 (n=99)	15.2	28.3	27.3	19.2	10.1
瑞国 (n=641)	7.0	12.3	29.2	31.4	20.1

7. まとめ——類似性と差異

スウェーデンの若者と日本の若者の性意識・性行動には類似性と差異の両方が見られるが、差異の方が全体的に支配的である。また、両国においていくつかの分野（女子の性欲、多数のセックス・パートナー、ポルノ観）では男女間の性意識・性行動の接近（ジェンダーフリー化）が指摘される。

セックスの前提として愛を要求するロマンチック・ラブ型の性規範はスウェーデン・日本ともに柔軟化してきている。しかし、スウェーデンと異なり、日本の若者世代には男女格差が見られ、ロマンチック・ラブ願望に依拠する性規範は日本の女子にもっとも支配的である。ジェンダーの非対称性といえるが、女子の性規範にも流動性が見られ、必ずしも結婚とは結びつかなくなっている。その場限り（一夜の）セックス体験者は、日本の若者の年齢が相対的に高いにもかかわらず、スウェーデンの若者よりも男女ともに極めて低く1割にも満たない。性規範の緩和傾向は見られるものの、日本の若者世代の性意識と実際の性行動のギャップが大きいことが明らかである。

セックスにおける平等に関しては、両国間に差がみられないのは女子の性欲と自慰への見方くらいである。極端な差が見られるのは買・売春への許容度であり、日本の若者の許容度はスウェーデンの若者よりも男女ともに高い。

セックスのリードに関しては、日本の若者も対等的な考えに向かいつつあるが、「幾分・大体一致する」という慎重な回答が過半数を占める。セックス・パートナーの数に対する規範意識は両国ともに緩んできているが、両国の男女が男子に対してより批判的である。性規範の対象が従来の性別ではなくパートナー数の適切さに移行してきていると考えられる。

買・売春に対する許容度は圧倒的に日本の若者に高い。特に、日本の男子は買春よりも売春に対して厳しい規範を見せている。NHK調査によると、若い男性の「お金をもらってセックス」に対する許容度が高くなってきていることが指摘されるが、若い男性の性意識・性行動は一律的ではなく流動的であるといえる。スウェーデンの若者の許容度の低さの背景としては、男女平等政策の浸透と1998年度に制定された買春禁止法の影響が考えられる。

買・売春と並んでポルノに対する許容度も日本の若者に高い。特に、女子の許容度はスウェーデンの女子に比べて著しく高い。ポルノを「非常に良くない」と思う日本女子はスウェーデン女子の5分の1以下である。さらに、刺激的であれば、屈辱的ではないという構図が見られ、性の不平等に対する認識・フェミニズム的な視点の欠如が指摘される。ジェンダーレスが明らかな分野である。NHK調査によれば、男女間でメディアの媒介手段（男性はアダルト・グラビア誌や成人マンガ、女性はマンガとテレビなど）は異なるものの、ポルノが刺激的であると見方に男女間の差はほとんど見られない。

同性愛に関しては、両国ともに女子の許容度が男子よりも高い。「ホモ・フォビア」はスウェー

デン男子に支配的であり、日本においては男女間の接近が見られる。

体に対する羞恥心や自画像に対する自信の欠如もしくは希薄さは日本の若者に著しく、スウェーデンの若者の安定した自信と極めて対照的である。社会の固定観念の見方に対する批判的姿勢が日本の男女両方に欠如する。

日本の若者に見られる性意識・性行動におけるジェンダーフリー化傾向にはスウェーデンのそれと共通する部分がある。しかし、ジェンダーフリーあるいはジェンダーレスというよりは、正確に表現すれば既存のジェンダー秩序に対する認識欠如は、セクシュアリティを創出する社会構造に組み込まれたジェンダー秩序についての認識欠如を反映していることが想定される。ジェンダー秩序は社会的に構築されるものであり、その背景的要因を重視する同性愛理論とフェミニズム理論が一致する点は、伝統的なマスキニティ（男らしさ）が基本的に社会の権力の組織構造とその規模に密接に結びつくことにおいてである³⁰。しかし、マスキニティと権力の連関関係を認めることは男性異性愛者の多くにとって容易ではなく、特にアンチ・フェミニズム論者からはことごとく否定されてきた。同性愛理論ならびにフェミニズム理論の両方が希薄な日本においては、マスキニティと権力の連関関係への認識も相対的に希薄であり、したがって現実におけるセクシュアリティへの影響も希薄であることが想定される。

注

- 1 Lees, S. (1993) *Sugar and Spice. Sexuality and Adolescent Girls*. Harmondsworth: Penguin Books.
- 2 Project leader: Thomas Johansson, professor, Centrum for Culture Study, Gothenberg University. Project has financed by The Swedish Council for Working Life and Social Research. アンケート調査は、家庭・家族関係、社会経済的背景、学校生活に対する評価、自画像、身体に対する見方、性意識・性行動、他の生徒たちの性体験についてどう思うか、性的犯罪と刑罰についてなど、合計 138 質問に及ぶ。
- 3 12 人性別不明。
- 4 大学生を調査対象としたのは、予定していた高等学校での調査が難しかったためである。
- 5 Esping-Andersen, G. (1990) *The Three Worlds of Capitalism*. Cambridge: Polity Press. Korpi, W. & Palme, J. (1999) Robin Hood, Matteus eller strikt likhet?, *Sociologisk Forskning* 1: 53-91.
- 6 講義出席者全員回答、しかし 20 歳以上の回答者 4 人は分析対象データから排除した。
- 7 NHK 出版 (2002) 『データブック NHK 日本人の性行動・性意識』NHK 出版社。
- 8 池谷壽夫・影山知花 (2003) 「高校生のセクシュアリティと性教育の課題」『日本福祉大学社会福祉論集』第 109 号, pp.85-136. 日本福祉大学。
- 9 Hammarén, N. & Johansson, T. (2002) *Könsordning eller könsoordning? Ungdomens sexuella landskap*. Rapport 2, Centrum för kulturstudier/Forum för studier av samtidskultur, Göteborgs universitet.
- 10 Herliz, C. (2001) *Allmänheten och hiv/aids-kunskaper, attityder och beteenden 1989-2000*. Rapport, Folkhälsoinstitutet.
- 11 NHK (2002), 160 ページ。
- 12 Hammarén, N. & Johansson, T. (Ibid.).
- 13 ひとつ留意しなければならないのは、日本の若者の半数がまだ性交体験をしていないことである。

- 14 Lag (1998: 408) om förbud mot köp av sexuella tjänster.
- 15 日本の若者の半数がまだ性交体験をしていない。
- 16 Connell, R. W. (1999) *Maskuliniteter*. Göteborg: Daidalos.
- 17 Hammarén, N. & Johansson, T. (Ibid.).
- 18 日本性教育協会 (1992) 『青少年とマンガ・コミックスに関する調査報告書』
- 19 たとえば, Lewin, B (ed) (1997) *Sex i Sverige. Om sexuallivet i Sverige 1996*. Stockholm: Folkhälsainstitutet
- 20 Hammaren, N. & Johansson, T. (Ibid.).
- 21 Winfridsson, G. (2002) "Kort sagt. Fakta om sexualitet, hönsroller och hiv" Bilaga till Hivaktuellt 2002: 1. Folkhälsainstitutet.
- 22 Hammarén, N. & Johansson, T. (Ibid.).
- 23 Connell, R.W. (ibid.).
- 24 Connell, R.W. (ibid.).
- 25 Hammarén, N. & Johansson, T. (Ibid.).
- 26 Johansson, T. (2002) What's Behind the Mask? Bodybuilding and Masculinity, In Thomas Johansson & Ove Sernhede (eds) *Lifestyle, Desire and Politics: Contemporary identities*. Gothenburg: Daidalos.
- 27 Edlund, B. (2003) Smalhetsideal och bantning bland barn och ungdomar, i Birgitta. Meurling (red) *Varför flickor? Ideal, självbilder och ätstörningar*. Lund: Studentlitteratur.
- 28 たとえば, Meurling, B. (red) *Varför flickor? Ideal, självbilder och ätstörningar*. Lund: Studentlitteratur.
- 29 Hudson, F. & Ineicken, B. (1991) *Taking it lying down. Sexuality and Teenage Motherhood*. London: MacMillan.
- Martin, K. (1996) *Puberty, Sexuality, and the Self. Girls and Boys at Adolescence*. London: Routledge.
- 30 Connell, R.W. (ibid.).